



メディアリテラシー教育の勧め

佐渡総合教育センター所長 加藤 雄一郎

正解が見えない難しい社会を生き抜く資質・能力を子どもたちに育成することは、私たちの大きな使命の一つであり、やりがいでもあります。

近年、ICTの発展により、多様なメディアの中で便利な生活ができています。しかし、何が正しい情報なのか、情報の分析・判断はどうすればよいのか、人に伝えて（拡散して）もよいのか等々、戸惑うことだらけです。情報処理能力だけでなく、メディアリテラシーが重要視されています。

さて、ICT活用研修と併せて、「メディアリテラシー研修会」を当センター主催で実施しました。子どもたちがデジタル時代を生き抜く力を付けるために“メディアリテラシー教育の勧め”がねらいです。講師のスマートニュースメディア研究所所長の山脇岳志様と同研究員の長澤江美様から講義とSNSシミュレータを使った授業を公開していただきました。研修後の感想を紹介します。

【教員の感想】

実際にコメントしたり、お勧め度の判定や公開を試みたり、他のコメントを見ることで、人によって記事のどの部分に着目しどう考えているのかが、かなり多様であることを体験できました。このような内容を授業で扱えるとメディアを見て、主体的に的確に判断できる子が育つのではないかと思います。

【生徒の感想】

メディアリテラシーの授業を受けて、本当のことなのか、フェイクニュースなのかがあまり分からなかったので、1つ1つの情報を全部真に受けるのではなく、自分で考えることも大切だと思いました。また、フィルターバブルという自分の都合のいい情報だけに耳を傾けるだけではなく、違う情報にも耳を傾け、フィルターバブルにならないようにしたいです。

「主体的・対話的で深い学び」の本質は、「クリティカルシンキング（吟味思考）」の育成とも言われています。メディアリテラシー教育で「吟味思考」を鍛えつつ、日常的に「吟味思考」を働かせる声掛けをしていきたいものです。

メディアリテラシー教育、始めてみませんか。

「深い学びに向かう対話」

下越教育事務所 指導主事 平野 徹

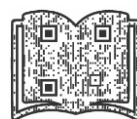
「対話が意見の発表会で終わってしまい、深まりを感じない」こんな悩みを感じたことはありませんか？

「対話的な学び」が「深い学び」につながるには、何が大切なのでしょうか？

まず、「対話的な学び」に対する教師自身の見方をアップデートしていく必要があります。子どもは問いに対して「自分の考えを出して」「仲間の考えを聞いて」「対話しながら考えを深める」という力を潜在的にもっています。そのことを職員間で共通理解した上で、目指す学びを構想する必要があります。これは、子どもを「教授の対象」ではなく「学びの主体」と見る立場です。「客観主義」の教育観ではなく「構成主義」の教育観です。「二項対立」で考える態度は、厳に慎まなければいけません。学校訪問を通して後者の教育観への転換が、今こそ必要だと感じています。

その上で、教師が子どもの学びをどれだけイメージできるかが重要となります。このことは、指導案のねらいや評価規準、本時の展開の児童生徒の姿に表されます。子どもの学びをイメージする力、さらに実際の授業の中で子どもたちの学びを見取り・解釈し・対応する力こそが「深い学びに向かう対話」の実現に必要であり、これを鍛える場が授業研究です。

下越教育事務所では、Teachers'2022において標記のテーマを特集しています。「深める問い」「対話の地図」をキーワードに、テーマに迫る実践事例を紹介しています。また、日々の授業改善に役立つ視点として、「授業改善15のポイント」を提案しています。こちらもぜひご活用ください。各種訪問では、みなさんと一緒に、子どもたちが「深い学び」を実現している姿を見付けていきたいと思っております。よろしくお願いいたします。



二次元コードの説明

【左】授業改善15のポイント

【右】Teachers'2022

自立活動と通級指導教室

教育指導主事 庄山 佳代子

特別支援学級に在籍する児童生徒の教育課程を考えるのは、担任と特別支援コーディネーター及び管理職・保護者です。一人一人の教育的ニーズを的確に把握し、成長に導かねばなりません。

自立活動は特別支援学級に在籍する児童生徒にとって大事な学習です。①健康の保持 ②心理的な安定 ③人間関係の形成 ④環境の把握 ⑤身体の動き ⑥コミュニケーション の6区分27項目に分かれています。課題をつかみ、解決への道のりを考え、実践を積み重ねます。

年度当初の「特別支援学級状況調査」では、佐渡市内すべての小・中学校特別支援学級で自立活動の時間が設定されていました。実施状況はどうでしょうか。

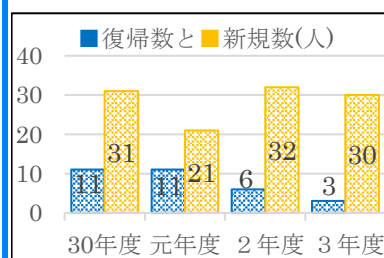
今、ニーズが高まっているのは「通級指導教室」です。原則として、通常学級に在籍し、支援が必要と判断された児童生徒に、個別で指導します。通級指導教室に通い始めて、落ち着きが見られるようになった、友達とのコミュニケーションがスムーズになった、などの成長を多くの方々が実感してきました。さらなる充実を求められています。

支援を必要とする児童生徒に対する教育は、支援学級だけでなく、通常の学級においても必要です。小・中学校すべての学級に必要な配慮について、考えませんか。学級経営の大事な視点だと考えます。

不登校に早期対応する体制を！

教育指導主事 名古屋 瑞穂

文科省の調査で昨年度の佐渡市の小中学校の不登校の児童生徒は、68名でした。令和2年度から1名増加しました。また、病気や家庭の事情による欠席が30日以上の子童生徒も16名おり、学校を休む児童・生徒の人数は、ほぼ横ばいです。全国的に不登校の人数が増加している中で各学校の努力で大幅な増加を防いでいることに感謝しています。一方で、小学生児童の増加が見られることが不安材料でもあります。全国で3年度がどうだったかは、10月下旬頃の調査結果を見ないと分かりませんが、近年の傾向から見るとさらなる増加が予想されます。佐渡は、全国に比して不登校の割合が低いと言われるようになりたいものです。そこで各学校が取組をすすめるとしたらどのようにしたら良いのでしょうか。



不登校を増加させないためには、左のグラフからも分かるように、新規の不登校を出さないための努力が必要です。

まず、早期の対応がポイントです。不適応の兆候が見えた場合、家庭訪問や教育相談を積極的に進めてください。佐渡市では、適応指導教室を設置するとともに心の教室相談員や訪問指導員を配置しています。県のスクールカウンセラーと併用しながら、教育相談体制や支援体制を充実させて個に応じたきめ細やかな対応をお願いします。

令和4年度 ICT活用研修会

8月1日に第2回の「ICT活用研修会」が行われました。真野小学校の椎井 慎太郎 先生から、「学校ICT環境の効果的活用（主に一人一台端末の活用に関する内容）」について、実践発表をしていただきました。

実践発表の中で椎井先生は、「『一人一台端末の効果的な活用』に迫るポイント』は、『日常的な活用』！」と話されていました。子どもたちも私たちも、使ってみないことには使えるようにはなりませんし、意欲もわきません。夏季休業中は、端末を使ってみる絶好の機会です。是非先生方も端末を手にとってみませんか。

